

福島正実
眉村卓

飢餓列島

福島正実
眉村 卓



飢餓列島

とう れつ が き
島 列 餓 飢

昭和四十九年十月三十一日 初版発行

著者

福 島 正 実
眉 村 卓

発行者

角 川 源 義

発行所

株式 会社
角 川 書 店

東京都千代田区富士見二の十三
☎一〇二 ☎東京一九五二〇八
電話東京(六五) 三二八(大代表)

印刷所

新興印刷株式会社

製本所

株式 会社
宮 田 製 本 所

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872133-0946(0)

飢^き
餓^が
列^{れつ}
島^{とう}

装
幀

角
田

純
男

その日は、久しぶりに、朝からひどくじめついた暑さになって、冷夏にやや馴れっこになりかけていた人々を驚かせた。テレビの天気予報は、不快指数が八六（全員不快）を越えたと、一つ覚えのように繰り返していた。それでも、午後になると、人々は街に繰り出した。街は白っぽい空から照りつける太陽光線にあふれて、風もなく、いまにも光化学スモッグ警報が出されそうだったが、なぜか、誰も、じっとしている気にはならなかった。

街に、人があふれていた。

メインストリートにも、横道にも、どこから出て来て、どこへ行くのか、無数の男や、女や、老人や子供や若者たちが歩いてた。ひとりひとりを見れば、忙しげな動作の者も、漫然とあてのなさそうな者も、はしゃいで見える者も、不機嫌そうな者もいたが、しばらくじっと見つめていれば、その人間の流れ全体が、よんだ川のそれのような、ひどく無気力で無目的な、一つのパターンを持って、ゆっくりと——だが絶えず動いているのがわかってくる。

そういえば、無気力なのは、人間だけではなかった。街そのものが惰性で生きていた。どこことなくさびれ、薄汚れて見えるのはそのせいだった。この繁華街の、メインストリートにさえ、あちこちに塵芥が山をなして放置されているが、それはもちろん、ごみ処理がこの二千万都市の能力を上まわってしまったことを意味すると同時に、それを処理するだけの精力と意志とを喪失してしまったことをもあらわしていた。いわばそれは、活動する大都市の積極的な新陳代謝の結果の排泄物というよりは、もう長いこと生きてきて、疲れきってしまった、途方もなく大きな図体の生物の、醜い老廃物といっ

た感じだったのだ。

ところによっては、燃料の決定的不足のため、もう無用の長物になりおおせたガソリン車が、乗り捨てられたまま片づけられずに車道に放置されて、錆びついていたし……少し気をつけてみると、舗装整備ができないためだろう、車道や歩道のあちこちがひび割れ、そのアスファルトの裂け目から、雑草が生えだして、強靱な生命力を誇示しているさまさえ見られた。

だがもちろん、そんな見馴れた光景を、特別に気にする者などはいはしない。人々の群れは、照りつける太陽の下を、汗を流し、ほこりにまみれながら動いていく。服装やスタイルが思いきってまちまちで、カラーが不統一にけばけばしいのが、この異常な暑さを、いつそう誇張するようで——若い女たちの、隈どりに似たどぎつい化粧の顔顔が、まるで祭りか何かの仮装行列の中にいるような錯覚を、ふと感じさせたりもした。

人の波は、超高層デパートのあたりで、いくつもの渦になって回転しはじめる。慢性の電力不足で、エアコン能力の低下したデパートの中は、それほど涼しくもないのだが、それでも戸外とはかなり違うので、人の流れはそこできくつかに分かれて絶えずビルの中へ吸いこまれ、吐きだされる人の列と衝突を繰り返すのだ。そこでは、人いきれと、汗のにおいと、何かわからない香料の香りとがまざりあい反応しあって、つんと鼻をつく刺激性のにおいに合成された……。

根上^{ねがさ}要吉^{ようきち}はいつか自分が、デパートの中へ吸いこまれていたのに気がついた。かれをとらえた人の流れは、まっすぐエスカレーターに向かっていた。抜け出すのも億劫^{おくせう}でそのまま流れに身をまかせていると、身体がしだいに人々の頭上にせりあがって、ショーケースとショーケースの間の通路を、いくつにも分かれた人の支流がゆっくり動いていくのが、まるで遊園地の迷路を見おろしているような感じに見えた。しかし、ショーケースの中の商品の量は、そこから見てもひどく貧弱で、あちこちに

「品切れ」とか「何日入荷予定」と書いた大きなアクリル・ボードのサインが置いてあるのが目についた。エネルギーが限度ぎりぎりなのか、エスカレーターはひどくのろく、足元で喘ぐような軋み音を立てた。

その音が、根上に、ふいに二か月前帰国する直前大旱魃^{かんぱつ}下のカンボジア南部で見た、恐るべきバツタの大群の襲来を思い起こさせた——そういえばその日も、こんなむし暑い日のことで、とつぜん真昼の陽光が、みるみる砂嵐かスコールの時のようにかげりはじめ、それと同時に、遠い雷鳴のような——あるいは空中を貨物列車が走ってくるような奇妙な音がしはじめたのだ。そして、つぎの二、三分の間に、空も地面も、野も家々も、すべてがトビバツタの群れにおおわれていた——その、長さ十センチもあるバツタたちが、根上たちの逃げこんだ小舎の屋根をおおい、ガラス窓を何重にも埋めつくして蠢^{うご}めき這いまわりぶつかりあい、飛び交うときの、何とも形容しにくいあの威嚇的な音——ザワザワ、ギリギリ、キイキイという雑音が、エスカレーターの立てる呻きに、ひどくよく似ていたのだ。

根上の胸に、そのときの恐怖と、生理的嫌悪感^{いやおう}とが、否応なしによみがえってきた。

びっしりと、ガラス一面にへばりついた昆虫たちは、巨大な複眼を蠢めかし頑丈な下顎をキリキリと噛みあわせながら、互いに押しあいへしあいして、何とかガラスを食い破り、小舎に侵入しようとしていた。短い触角と四つの短肢と、異常に発達した長大な後肢とが絶えずリズムカルに動き、淡緑色にぶよつく節のある下腹が喘ぐのを見ていると、それはたんなる虫の群れではなく、巨大な機械の精巧な一部がむきだしになって目の前で動いているかのようなようだ。生物界を律する非情なメカニズムのシンボルを、見せつけられるような重圧感があった。

かれらは、いま窓ガラスの上に、十センチもの厚さで重なりあっていたかと思うと、とつぜん何か

の指令を受けたかのように、突風さながらにいつせいに空中に舞い——つぎの瞬間にはまた、吹雪のようにガラスめがけて体当たりしてきた。そのわずかな合い間に見える戸外には、文字通り何億、何十億匹のバッタが乱舞していた。空中も、地上も、見わたすかぎりがバッタだった。樹には、幹といわず枝といわずバッタがへばりついていて、畑全体がバッタの淡緑色の身体と淡褐色の翅の織りなす動く絨毯におおわれていた。農具も、車も、電柱も、垣根もバッタに埋めつくされ、電線はたかられたバッタの重みでしなっていた。地上からは絶えず竜巻のように舞いあがるバッタの柱が空に向かつてのび、逃げ遅れた馬が、発狂して滅茶滅茶にあればいたが、その姿さえ、たちまちバッタの群れの向こうに消えた。

どこをどう食い破ったのか、いつの間にか小舎の中までバッタが舞いこんできた。バッタは小舎の中にあった麦わら帽を食い、馬具に、土間に投げだされていた古新聞の束にたかった。根上たちは総毛立ち狂ったように両手両足をふりまわしてバッタどもをたたき落とし踏み潰した。バッタの一部は、土間の柔らかい土に産卵しかけていた。

バッタの襲来は、三時間つづいた。そして潮の引くようにどこかへ移動して行った。だが、かれらの通過していったあとは畑も野も、まるで野火に焼き払われたかのように、緑色のものは何一つ残っていなかった。そのかわり、衝突や共食いで落ちた瀕死のバッタたちが地上一面をおおっていた。ヒクヒクと蠢めくバッタたちに埋めつくされた荒野そのものが、まるで、いま息をひきとろうとしている巨大な生物のように動いてみえ、サワサワ、キリキリというその耳障りな音が、いつまでも耳もとから消えなかった。彼はバッタの一匹が耳に飛びこんでいるのではないかと思って医師に診てもらった。じつさい、逃げ遅れたあの馬は、バッタに内耳まで食い破られて狂死していた。もちろん、かれの耳からバッタは出てこなかった。にもかかわらずその音は、いつまでも耳の奥に残って、ふとした

瞬間にかれの思考をかき乱した。かれはいまでも、まだ自分がバッタどもの旋風の中にいるような悪夢を見て飛び起きることがあった。いや事実、かれらはそのとき、ちょうど襲った土地に産卵していくように、かれの精神の内部に不安の卵を産みつけていったのかもしれない。かれが日本へ帰ってきてもう二か月になるというのに、どうしても落ち着くことができないのは、どう考えても、そのせいのようなのだ……。

2

ひとときわ高いサックスの音色が、根上をわれに還らせた。気がついてみるとかれは、デパートの屋上に来ていた。そこも人が一杯で、かれは脂汗を流しながら渦巻く人の群れの中を横切ろうとしていた。

人の頭ごしに、屋上の向こう端にしつらえた舞台の上で、演奏している黒人の真黒な顔と、陽光を反射する金管楽器の光が見えた。背後で、はしゃいだ外国なまりの日本語が卑猥な言葉を喚いていた。振り返ると、そこにも、頬骨の高い、黒ずんだ肌のアジア人の一団がいた。このごろ、少し人の集まるところに、東南アジア人たちの姿を見かけないことは珍しいが、かれらは、服装やムードからして、東南アジア諸国からの技術研修者たちらしかった。日本政府が、発展途上国援助の一環として、国連から引き受けさせられた連中なのだ。

かれらはアルコールのおいを真昼の空気の中に強く発散させていた。周囲の日本人たちが露わに顔をしかめて道をあけた。すると、人垣の中から、いきなり、バタフライだけの若い女たちが数人、むきだしの乳房で人をかき分けるようにして飛びだしてきた。

「どいてよ！」

先頭の女が、前に立ちふさがるかたちになった根上を見あげるようにして叫んだ。女たちは、顔から胸へ、腹から肢へかけて、目もあざやかなボディ・ペインティングをほどこしていた。赤、青、黄、緑、それに数種類の原色をこねあわせたような奇怪な色の絵具が乳房を巨大な目玉や口や性器のかたみに塗り分けていた。描かれた絵は、女たちの身体の動きに応じてグロテスクな笑いを作ったり、卑猥なしかめ面をつくったりした。女たちは手にしていたポリエチレンのバット状のもので、手荒に根上を押しつけた。バットは、明らかに、男根のパロディのかたちをしていた。

女たちは、舞台の前に投げだされるように置かれていたフォーム・ラバーのクッションの上に飛びあがると、嬌声をあげて互いになぐりあいをはじめた。舞台の上のバンドが、ビートのきいたドラムをキーノートとする、ダイナミックな曲を演奏しはじめた。バタカである。

舞台をとりまくアジア人たちや、ジーンズの少年たちが、どつとはやしたてた。子供の手を引いた中年の客たちが、眉をひそめて後じさりした。

二か月前、久しぶりで帰国して、はじめてこの種のゲームを白昼堂々と見せられたときは、根上もあっけにと取られたものだった。けれども、いまではもう馴れっこになって、物珍しささえ、まったく感じなかった。それは、周囲のほとんどの人々も同じだった。ほんの一部が、さも汚なそうに唇をゆがめ、眦をつりあげるだけで、ほかの大半は無感動に顔をそむけるばかり。そして、少年たちやアジア人たちはそうした大人たちの反応をも対象にして、さも楽しげにはやし立てているのだった。

少年たちの眼や口もとは、なまな欲情が脂のように浮きだし、ギラついていた。それはついこの間まで、欲情のはけ口を持たない欲求不満な若者や、酒に酔い痴れた中年男の顔にしか見られなかった、疲れ、汚れた表情だった。夜更けの異常な時間にだけ見られた、ねじ曲がった情動のはずだった。真昼のまぶしい陽光の中で、幼児をまじえた何百人もの目の前で繰り広げられる光景ではないはずだ。

いきなり、どこかから、あわてたような男の声があがった。

長髪の少年たちの一角がつき崩されて、そこから、黒ずくめのつめ襟の服を着、制帽をかぶった男たちが二、三人飛びだしてきた。デパートのガードマンだった。おそろしく背の高いひとりが、目指す人間を見失ったかして、あわてて周囲を見まわした。根上は、そのガードマンに射すくめられて、わけもなくぎょっとした。だが、かれは、たちまち探していたものを見つけた。

「おい、あんた、待て、待てといったら！」

ガードマンは、いま、バンドの前を素通りして、屋上の端へ行きかけた、さっきの男に向かって大声で喚くと、同僚たちをうながしてそっちへ走った。

そのとき、すでに男は、ガード・フェンスに手をかけていた。そして、意外なほど身軽な動作で、フェンスをよじのぼりはじめた。

「身なげだ！」

誰かが、押し殺した声で言った。

男は、たちまち二メートル以上あるフェンスの上まで達すると、ひょいと振り返って、いまフェンスの外側に追いついたガードマンたちを見おろした。

「降りてこい、この気ちがいめ！」

背の高いガードマンが、いらだちをそのままあらわす唖れた声で言った。フェンスの上の男は、無感動な表情で、いかついガードマンの顔を一瞬見つめていたが、すぐ、子供のようによいよいやをした。ガードマンが猿轡をのびした。自殺者は身軽にフェンスの内側に飛びおけると、屋上の端のコンクリートの手すりに一動作で飛びあがった。ガードマンたちは、口々に何やら喚きながら、フェンスを平手でなぐりつけた。それが、周囲で事の成り行きを見守っていた群衆に、動物園の檻の中で、腹を

立てているゴリラそっくりに見えたに違いない——切迫した空気の、どこかにはころびができたように、誰かが、頓狂な笑い声を立てた。手すりの上に仁王立ちになった男が、一度地上をのぞきこみ、それからもう一度、フェンスの内側の群衆を振り返った。その顔に、根上は、最近誰の顔にもほとんど見たことのない、穏やかな微笑を見た。何の不安も、緊張も、焦燥もない柔和な笑顔だった。かれはふいに、檻の中にいるゴリラは、ガードマンたちだけではない、と思った。その自殺者をおぞましげに見守っている、根上を含めた見物人のみんなが檻に入れられた類人猿にすぎないのだ。そして、いまフェンスを乗り越え、死を目前にしたその男だけが、ようやく束縛のがれて人間になったのだ。その顔を、そんなにも温和に、慈悲深いまでに美しく見せているのは、自殺という手段によって、この現実を脱出するめどのついた者が、未だに檻の中で滑稽な猿まねを演じているものに感ずる憐愍^{れんひん}の情なのだ……。

ガードマンが、フェンスを、不器用な仕種^{しぐさ}でよじのぼりはじめた。だが、最初の男がフェンスの上辺にまで辿りつかないうちに、自殺者は、コンクリートの手すりから、空間に向かって身を躍らせた。男の姿は、一瞬、大手を広げて空間を泳ぐかに見えたが、つぎの瞬間にはもう視界から消えていた。群衆の中に、低いざわめきが広がった。

「ちきしょう、これで今週はもう三人めだぞ！ おれの勤務評定はめっちゃめっちゃだ！ あのコンビユーター何とかならねえか……」

ガードマンのひとり、興奮したみ声で人目もはばからず喚きだした。言っても仕方のないことなのだが、どうにも自分を抑えられないのだった。

それを見て、周囲の群衆から、また耐え性のない失笑が洩れた。そして根上も、ふと気づくと、自分自身、だらしなく口もとをゆがめていた……。

根上がデパートから出たときはもう、自殺者の屍体は手ぎわよく片づけられ、事後処理もすっかり終わって、自殺者の墜死した場所の人型だけが、路上に白いチョークでしるされていたが、そこには警官一人立っているでもなく、弥次馬などまったくかかっていなかった。投身自殺など、いわば日常茶飯事にすぎず、それだけに当局の処理も巧みになって、人々の好奇心を煽ることも、もうなくなっていたのである。

いや、根上自身にしても、二か月前はじめてこの種の事件を目撃したときに感じた、あの異常に昂ぶった気持ちはすでに味わえなくなっていた。

惨死者を見たのは、もちろんはじめてではなかった。いやむしろ、ある意味では、馴れっこになるぐらい見ていた。ヴェトナムからカンボジア、タイ、インドと、日本語教師をしながらまわって歩いたこの二年あまりの間に、あるいは洪水で、あるいは旱魃で——そしてその結果必ず起こる暴動や飢饉や疫病で、路上に行き倒れになり、高温のためたちまち腐敗していく、見るも無残な死体はいやになるほど見た。最初のうち、根上は、それを見るたびに、持って行き場の無い怒りの発作に襲われた。それは、国連が、政府が、あるいはさまざまな評論家たちが言い立て、書き立てていた後進国援助の実状が、まったく描かれた餅であることの、あまりにも無残な証拠だった。二十世紀半ば過ぎから、あれほどに問題にされていたにもかかわらず、アジアとアフリカとは、世界をおおうあらゆるトラブル——人口問題、食料問題、民族主義運動とイデオロギー闘争の埒^{ちや}塀^ばとしての症状を濃厚にするばかりだった。

国連と、先進諸国との懸命の努力にもかかわらず、アジアの人口は野放図に増大する一方だった。

ベース・コントロールのために、膨大な医薬品と多数の人員とが割かれ、その必要性とその結果得られる福祉の有難さとを、いくら説いてまわっても、それはほとんど目に見えるほどの成果をあげることもできなかった。いや……ここ十数年、繰り返し北半球を襲う異常気象による大洪水や旱魃や飢饉によって、何万、何十万という餓死者が出てさえ、それは、年間統計の数字の中ではまったく人口増加抑止の要因になっていない——それほどに、人口増の潮のような力は大きすぎた。

食料増産の成果は、事実、先進諸国の、ひとところとは比較にならないほどの財政的技術的援助によって、かなりの度合いに上がった。世界食料会議も世界人口会議も、能率的に仕事をした。——しかしそれも、予測をはるかに上まわる人口増と、計画をどうしても下まわる緑化革命の遅延と、ジリジリと押し寄せてくる地球の冷却化による凶作不作の連続とによって相殺された。その上に、定量化しえないファクターが加わった——先進国の生活水準、カロリー水準に追いつこうとする、開発途上国の個人の欲望指向の急上昇である。それは、種族間や、民族間、国家間の確執を相乗的に増大し、福祉の不均等に対する怨恨と、欲求不満とをいっそう強め——そして、先進国中心型の世界秩序に対する反撥と、その結果としての混乱とをもたらしつつあったのだ。そして同時に、そうした国際的不安は、とくに先進諸国の人々に影響を与え、一種の被害妄想をたかぶらせた。

根上が、際限なしにつづけていた旅を打ちきって、故国に帰る気になったのは、自分では、行く先でみずから体験した、そうした悲惨や矛盾を、何とか自分なりに日本人に訴えたい、そうすることによって解決の糸口を掴みたいという気持ちからだと思っていたが……その実は、そのどうにもならない不幸な現実、かれの神経が、耐えられなくなっていたからなのかも知れなかった。

それでも、かれは最初のうち、かつてかれの小説や翻訳を買ってくれたジャーナリズムの友人や知人を片端から訪れては、現地の実状を訴えようとした。かれは精力的に、毎日のようにジャーナリス

トたちに会い、あるときは激昂して国連の無能をのしり、結局は白色人種の、有色人種に対するひとりのよがりな無理解、さげすみとしか考えられない、現地での後進地域開発政策の失敗を論じ、同時に、故国日本の政府や大企業の、あまりといえはあまりに損得勘定ずくの海外援助の愚かしさを弾劾し——また時には、どうにもならないほど無知で、無目的で、無為で動物的な現地人たちの意識の低さに愛想をつかしてみせ、だからこそ一刻も早くアジア全体を一つのエリアと見なす強力な政策が、意識が必要なのだ、そのための強力なキャンペーンを始めるべきなのだ、それができるのは同じアジア人である日本人だけなのだ、と喋りまくった。

政治家にも会った。かれらは一様に鷹揚だった。かれの主張に、理解さえしめし、資金援助のため一役買おうという者もいた。けれどもそれは、例外なく、具体性をまったく欠くただの外交辞礼にすぎなかった。

そうして喋って回るうちに、根上は、相手側の、奇妙に共通した反応に否応なしに気がついた。とくにマスコミの当事者たちは、根上の意見には、少しも反論せず、熱心に同意さえするのだが、いざということになる、たいていの場合は巧みに、時にはかなり露骨に、そういった話題はすでに語りつくされてしまって、いまさら取りあげるには価しない、といって断わるのが常だった。

たまには、かれの議論に、熱っぽく応ずるジャーナリストもいた。

「とにかく、その問題は、ここ何年も、ありとあらゆる角度から取りあげられてきたし論評もされてきた。いまのところ、うちではことあらためてその問題をむしかえすつもりはありません」

「要するに、流行としてのつとめは果たしたから、もうかかずらわる必要を認めないということですか」

「そういう言い方がしたければ、それでもかまいませんよ」